

## 特集「アーカイブ」によせて

「アーカイブ」への注目が高まっている。その背景には、デジタル技術の普及と現代美術の非物質化がある。

デジタル技術によって検索性が高まれば、素材の収集時に厳しく選別し体系的に秩序だった整理をせずとも、検索によって事後的に利用価値を発見できるようになる。また、デジタル化によってデータの劣化を防げれば、作品の物理的な保管のための技術を磨いてきた美術館以外に、美術にまつわる記録を保管する施設「アーカイブス」も重要な役割を果たすことになる。とりわけインターネットの出現以降、データの共有が著しく簡便になり、アーカイブ化されたデータの二次利用を促している。

一方、美術作品のメディアムが多様化し、パフォーマンス、仮設的なインスタレーション、建物内に収蔵できないランドアート、ワークショップ、アートプロジェクトなど美術館での保存が困難な形式が一般化すると、作品に関する情報は、写真や映像、印刷物といった別の媒体で残される。捉えどころの無くなった作品の付近に、これらの資料の集積が起こり、あるいは積極的に集積するための機関が必要とされ、それらは「アーカイブ」と呼ばれた。集積した資料の無秩序さに正統的な権威を覆す魅力を感じ取りながら、アーカイブの形式を模する作品も生み出されてきた。

「アーカイブ」をテーマに設定した本特集は、5本の論考によって、こうした現状に向き合うときに生じる課題を明らかにしようとした。

生貝直人は、デジタル時代における新しい共有の仕組みを実現するための条件をヨーロッパの事例を参照しながら論じている。アーカイブの利活用を適切に促進するためには、メタデータのオープンデータ化やアグリゲーターの整備が求められる。ヨーロッパから生まれたこの動きは、グーグルなどアメリカ合衆国のIT企業が主導するグローバルな情報プラットフォームに対抗して、文化の多様性を守るという理念に基づいている。このことはアーカイブする主体が不可避的にもつ権力の問題をあぶり出している。

デジタル化によって促進される作品データの共有は、次なる創作を触発する一方で、アーカイブを構成する個々の著作物に関する権利の

問題も生じさせる。水野祐は、法律専門家の立場から、作品およびそれに関する資料を取り巻く法的状況を整理した上で、デジタル化時代の権利のあり方を構想し、創造性を刺激するアーカイブを提案する。

一方で、美術の歴史的展開とアーカイブとの関係については2本の英語論文を訳出した。一つは、1970年にニューヨーク近代美術館で開催された「情報」展のカタログに掲載された、本展企画者キナストン・マクシャインの文章である。この展覧会は、社会のメディア環境の変化、とりわけフィルムやビデオの普及を背景として1960年代に美術が非物質化した動きを捉えた画期的な展覧会であった。この文章中には「アーカイブ」という概念は一言も触れられてはいない。だが、訳者解題で上崎千は、マクシャインが「マテリアル(資料=素材)」と呼んだ、物体と情報の間に介在するものに注目し、この展覧会で紹介された美術の動向に今日のアーカイブ的作品の端緒を見る。

もう一つは、2004年に発表されたハル・フォスターの「アーカイブ的衝動」である。この論文は、主に1990年代に現れたアーカイブ的作品について論じている。こうした作品としての「私的」アーカイブは、秩序を持った規範的な「公的」アーカイブや従来のフォーマリスティックな作品の双方に対抗し、転覆するものとして評価することもできる。だが、この論文でフォスターが強調するのは、こうした作品が積極的に素材同士の間を繋ぎ合わせる点である。中野勉は訳者解題で、フォスターのこの指摘を、クレイグ・オーウェンスらのポストモダニズム批評を乗り越える、新たな理論構築に向かうものと位置づけている。

このフォスター論文以後のアーカイブ的作品の現状について山崎潤也は、アーカイブと表現の関わり方の観点から様々な種類の作品を整理した上で、大きくは二つの流れに分け、両者が共存している状態として描き出した。一つは資料の量の膨大さが重要となる作品群で、その中で山崎は鑑賞者の能動的な参加を促す作品に可能性を見出す。もう一つは無秩序な資料の集積から新たな物語を生み出す作品群である。前者はオーウェンスが評価した点を、後者はフォスターが評価した点をより積極的に展

開した作品と言うこともできよう。

本特集では「アーカイブ」というキーワードから導かれるいくつかの問題を、1960年代から今日までの美術の歴史的な展開も踏まえながら、俎上に上げた。すなわち、アーカイブの主体と権力、文化の多様性の問題、個別の資料=素材の権利の問題、二次創作にも繋がる利用者の能動的な参与の問題などである。本特集がデジタル化時代の美術とアーカイブ、そしてその保存と利活用について考えるための糸口となることを願う。

(驚田めるろ)